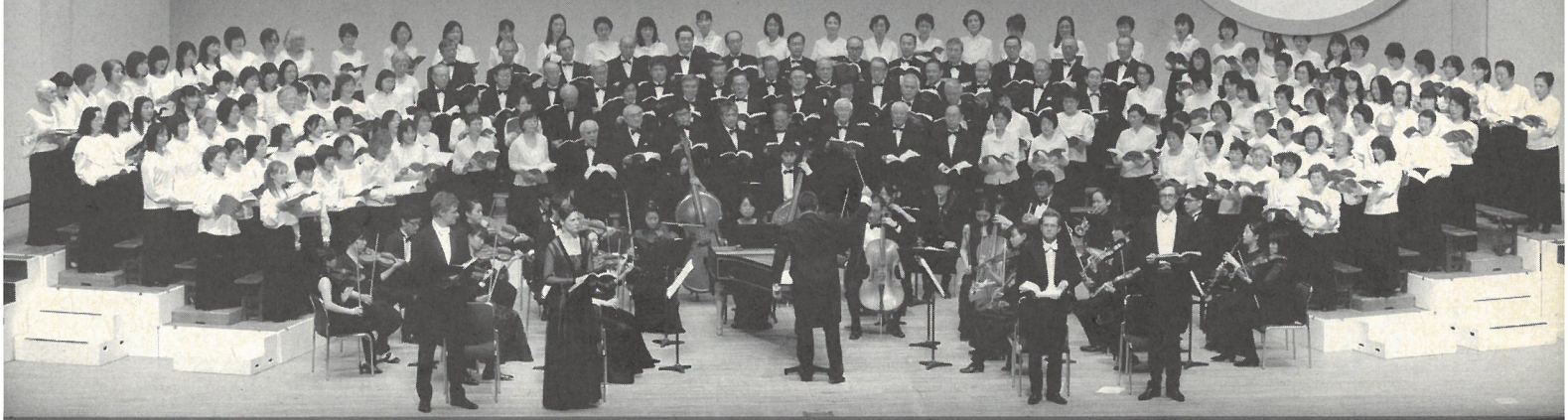
発行日　2013年10月20日（隔月20日発行）　通巻305号

日本国際ボランティアセンター　会報誌
トライアル・アンド・エラー（試行錯誤）

Trial & Error

No.305
November-December 2013



特集

JVC国際協力コンサート

25周年を機に変わること、変えないもの

写真上：2012年東京公演。150名超の合唱団員はすべてボランティアとして参加している。
写真下：このコンサートの創立者 / 実行委員長のアイネス・パスカビル。

JVC Japan International Volunteer Center

特集

JVC国際協力コンサート

25周年を機に変わること、変えないもの

「現地の人を支えるJVCの活動を応援しよう」との想いから始まったJVC国際協力コンサートは、今年で25周年を迎える。毎年100名を越える合唱団の歌声が東京と大阪のクリスマスを彩るこのコンサート、その創設者であり実行委員長でもあるアイネス・バスカビルが今年で一線から身を引くことになった。そこで、コンサートが始まった頃からこれまでの経緯を中心に関係者に話を聞いた。（編集部）

ボランティア精神と国際性に支えられて

JVCコンサート実行委員長／JVC理事　アイネス・バスカビル

■ソマリアで見えた希望から

この二十五年は飛ぶように過ぎました。成長した子どもたちが巣立ち、夫のデイビッドが二度目に来日したのが一九八〇年。一緒に再来日した私は、その後五年ほどRIJ（国際難民支援会）のために支援コンサートを開催していました。その資金をRIJは世界各地で活動する国際NGOに分配しますが、そのうち当時小さかったJVCだけが日本生まれの団体でした。

今でもそうですが、当時から私は資金の受け取り先であるNGOの活動現場を度々訪問していました。当時ソマリアで難民支援をしていたJVCを初めて訪ねた八四年は、あの悲惨なオガデンでの飢饉（きがん）の時※注①でした。そこで働く若いJVCスタッフたちの意欲やその取り組みに、私は強く心を打たれました。難民に「これが必要だ」と言い渡すのではなく、彼らの話に耳を傾け、必要とされる支援を提供していたのです。私の訪問中、何人の赤ん坊が短い生涯を閉じたでしょうか。日本のスタッフは泣き叫ぶ母親を抱きしめていました。半砂漠地帯、乾燥地帯と言われるソマリアですが、やがてトウモロコシの畑ができ始め、人々が自活できるようになり、希望が見えてきました。そこで思いついたのです。JVCという、このまだほとんど知られていない小さな日本のNGOの活動のために、「国際協力コンサート」を企画してみようと。

そして、JVC創設者のひとりであり当時の事務局長でもあった星野昌子（ほしのまさこ）さんの全面的な協力を得て、最初のコンサートを八九年に東京で開催することになりました。JVCの名のとおり、特に「ボランティア精神」と「国際性」とに基づいてこのコンサートを実現するべく、私は全力を尽くしました。

■ボランティア精神あふれる人たちとともに

開催に向けて動き出した当時は、まだ日本国内のNGO自体の数も少なく、知名度もありませんでした。しかし、ボランティア精神は徐々に広がりを見せていきます。コンサート会場である昭和女子大学人見記念講堂は、無料で会場を提供してくれました。第一回公演には実に五百人以上が合唱団員として参加しました。その合唱指導は、郡司博（ぐんじひろし）さんが引き受けてくれました。合唱団員の多さから年明けに再演した際にも、再び郡司さんが面倒を見てくれました。

巣山（すやま）ユリアさんと三田眞知子（みたまちこ）さんは、生え抜きのボランティア。このコンサートの運営を実務面と心理面とで支えるJVCコンサート実行委員会、その初代委員です。その年に来日した指揮者、巨匠マキシム・ショスタコビッチを公演後に目黒にある老舗のとんかつ屋さんでねぎらったのもこの実行委員会でした。田中菊子（たなかきくこ）さんも、私の五度にわたる執拗（しつよう）な電話攻勢で同じく初代委員を引き受けて以来、今日まで熱心に働いてくれています。長年にわたるもうひとりのボランティア五味澄子（ごみすみこ）さんは今年九十歳を迎えられました。

その後、東京での毎年のコンサートが軌道に乗りつつあった九十四年、猪俣寛彦（いのまたひろひこ）さんの尽力で大阪でもコンサートを始めることになりました。私と東京でのコンサートのことを紹介した『天声人語』（朝日新聞、九二年十一月十九日付）を読んだ猪俣さんが、第一回目の大阪でのコンサートの費用全額を気前よく提供してくれたのです。また、延原武春（のぶはらたけはる）さんは世界に知られた指揮者で、テレマン室内管弦楽団（当時、現テレマン室内オーケストラ）の創立者でもあり、かつ百人の団員を抱える合唱団コードリベット・コールの音楽監督でもある方です。この延原さんの一団が大阪でのコンサートに参加してくれることになり、現在に至るまで継続して協力してくれています。

九七年から事務局として手伝ってくれた岩間邦夫（いわまくにお）さんは、一年以上にわたってほとんど無給で働いてくれました（彼はそ

※注①・83～85年にかけてエチオピア周辺を襲った干ばつを原因とした飢饉。100万人以上が餓死したと言われている。

■ソマリアでJVCの活動を視察するアイネス（写真左端、87年頃撮影）。

■自らも本番公演で歌うとともに、開演のあいさつを担う（2012年撮影）。

の後ＪＶＣのスタッフになりました）。スタッフの荻野洋子さんが事務局を担ってくれた時には、関西経済連合会の要人たちの前で支援依頼のためにプレゼンする機会がありました。彼女は大変緊張していましたが、要人たちが浴びせる執拗な質問を見事にさばいて、支援を勝ち取ったのです。

ボランティア精神というのは、日本社会ではなかなか理解されづらい概念ですが、このコンサートには多数のボランティアが参加してくれて今日まで続いてきました。コンサートにかかる諸費用は多数の企業の方々からの寄付によってまかなわれますし、公演のチケットの大半は、東京と大阪在住の合唱団員が手売りしてくれます。

■国際性、それゆえの葛藤も

このコンサートの「国際性」についても説明しましょう。曲目であるヘンデルの『メサイア』自体が、ヨーロッパで創作されてイエス・キリストを主人公にした物語でありながら世界各地で楽しまれている、国際的かつ普遍的な作品です。『メサイア』の主題である「苦悩と希望」は、抑圧や飢餓や戦争や津波を経験した今日の人々の状況とそれらへのＪＶＣの活動を反映しています。もうひとつの曲目であるバッハの『クリスマス・オラトリオ』は、ささやかな始まりと平和のありがたさを現しています。

コンサートのボランティア、合唱団員、楽団員の多くが日本人ですが、これまでのプロ指揮者二十五人のうち二十二人はヨーロッパおよび米国から参加しました。ソリストの多くも外国から訪れています。参加者の間の性格の違いや文化の違いからの行き違いもありますが、やはり得るものは大きく、お互いの文化や歴史から学ぶものが数多くあります。

ノルウェーの指揮者であるライダル・ハウゲ（〇八年来日）は、「広島訪問は終生忘れられない」と力説していました。ニューヨークの指揮者、バーバラ・ヤー（二〇〇〇年来日、唯一の女性指揮者）は、公演後にコードリベット・コールが英語で歌った伝統的な感謝の祈り（benediction）に涙を流していました。ジェイムス・キャバノー（九十四年来日）はダブリン市出身の指揮者です。彼は、私がＪＶＣボランティアとアイルランドの合唱団と合同での聖パトリック大聖堂における『メサイア』の演奏を九十六年に企画した時に便宜をはかってくれました（『メサイア』の初演はダブリンで病院への支援コンサートとして演奏されています）。そこで上げた収益はアイルランド癌協会に渡されました。米国人指揮者のジェフリー・リンク（九七年／〇六年来日）は握り寿司が大好物でした。ローランド・ジョンソン（〇一年来日）は、私の故郷であるウィンスコンシン州マディソン市出身の指揮者です。彼は八十歳を越えていましたが、連日の練習、そして長時間にわたる二回の本番公演をプロ精神を発揮して最後までやり遂げてくれました。

国籍や性格、意見の違いから、ときには誤解も生じました。八十九年に来日したショスタコビッチ（ソ連生まれ、八十一年に家族と米国に亡命）は、コンサート終了後に訪れた私の家の台所で危うく郡司さんと殴り合いになるところでした。祖国脱出の是非についての議論の末でした。今だから言えますが、〇九年のコンサートでは、指揮者とアルト歌手が同じドイツ出身でしたが、演奏の技術的な面で妥協点が見つからず、最後の二週間はお互いに口もききませんでした。ありがたいことにコンサートは無事終了しましたが。

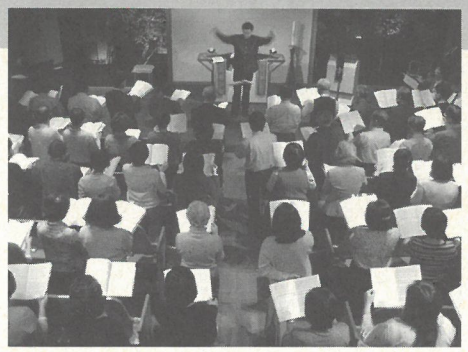
■このコンサートが必要とされる限り、これからも

こうした様々なことを乗り越えて、「ショーは続いてきた」のです。これまで約五万七千人の方がこのコンサートに参加しました。その方たちも含めて私たち全員が、この複雑な世界情勢に関心を持っています。そして、途上国に住む同胞から学び、支援の手を差し伸べる必要性を常に胆に銘じておきたいものです。コンサートに来ていただく方には音楽を楽しんでいただくとともに、なぜこのコンサートが開かれているのか、その「理由」についてもぜひ考えていただきたいと思います。

これまでこのコンサートが生み出してきた合計約二億三千万円の資金は、ＪＶＣのこれまでの世界各国ならびに東日本大震災被災地での活動に充てられてきました。参加してくださった皆さま、本当にありがとうございました。

今の私の願いはただひとつ。二〇一四年以降も末永く、このＪＶＣ国際協力コンサートの「ボランティア精神」、「国際性」、そして「財政的支援」が引き継がれていくことです。皆さん、がんばってください！

■大阪公演で当日ボランティアと（写真前列右から二人目が嶋、2009年撮影）。



■JVC合唱団は新宿の教会を借りて毎週練習している。写真の指導は青木氏。

JVC合唱団のこと

合唱団事務局　柴（しば）　大元（ひろゆき）

八十八年、学生だった私はベートーヴェンの「第九」が歌いたくて郡司博さんの指導する合唱団に参加しました。そこで当時から郡司先生と親しかったアイネスさんと出会いました。八十九年にこのJVC国際協力コンサートが始まり、私もその第一回公演に合唱団員として参加しました。その時の会場の熱気は今も憶えています。この時初めて、アイネスさんの国際協力活動に対する想い、そしてコンサートを実現させたその行動力を知りました。

一般企業勤務を経て合唱を中心とする舞台制作者になった私は、二〇〇〇年に当時まだ学生だったカウンターテノール歌手の青木洋也（あおき ひろや）さんと知り合います。彼に合唱団の指導を依頼するなかで、私はその非凡な音楽的才能と人を惹（ひ）きつける力に魅了されました。〇三年にアイネスさんから「JVC国際協力コンサートの専属合唱団をつくりたい、良い合唱指導者はいないか」という相談を受けたときには、すぐに青木さんを推薦しました。当時二十七歳という彼の若さに不安を感じられたようですが、実行委員会の方々には実際の練習指導を見て納得していただきました。こうして翌〇四年、「青木指導体制によるJVC合唱団」が誕生しました。

このJVC合唱団には純粋に合唱が好きな方や青木さんのファンの方も沢山いますが、歌うことでボランティア活動ができる、国際協力の一翼を担えるから、という方も大勢います。

そのJVC合唱団も十年目、合唱指導者として引っ張ってきた青木さんが満を持して本番の指揮台に上がります。そして、アイネスさんは卒業されるとの事。本当にお疲れさまでした。私も参加させていただき、とても光栄で、感謝の気持ちで一杯です。

今回はひとつの区切り、来年から新たなシーズンが始まります。今後もアイネスさんの精神を受け継ぎ、「JVCの活動支援」と「合唱音楽の喜びを共に」という合唱団のミッションを掲げて頑張ってまいります。

ベネフィットのために

JVC理事　嶋（しま）　紀晶（としあき）

アイネス、デイビッド・バスカビル夫妻と初めて会ったのは八十四年のクリスマス。場所はソマリアのルーク。エチオピアからの難民への緊急救援活動をJVCが行なっていた時でした。その後も数回にわたってソマリアに来られたアイネスさんに、日々の活動に熱中するあまり自分たちの生活や衛生環境の管理が疎（おろそ）かになりがちな私たちは、よく叱られました。

私が日本に帰国し大阪で暮らし始めた八十八年の翌年、東京でコンサートが始まりました。九十四年になり、アイネスさんより「大阪でもコンサートをしますから手伝ってください」と連絡をいただきました。以来二十年間、共にソマリアで働いていた妻と運営のお手伝いをする機会をいただいています。

JVCの基盤が弱い大阪で今年二十回目の公演を行なえるのは、初演から出演いただいているコードリベット・コールさんのご協力があってこそのことです。コードリベット・コールさんは六十余年の歴史を持つアマチュアの合唱団。音楽監督の延原武春さんのもと百人を超える団員の方々が毎週木曜日に練習をされています。また、指揮者・ソリスト接遇（せつぐう）やステージマネージャーでご協力いただいている北川さん、伊藤さん、佐々木さん、そして公演当日のボランティアの方々の協力によって続けてこられました。

一七三四年に作曲された『クリスマス・オラトリオ』、一七四二年初演の『メサイア』、どちらも時代を超えて歌い続けられています。特に『メサイア』の初演は、ダブリンで病院の支援のための演奏会として行なわれました。その後も作曲家ヘンデルは自らの指揮によってロンドンの孤児のための養育院などで毎年演奏会を行ないました。

アイネスさんは引退されますが、慈善演奏会を続けたヘンデルの意志に敬意を表し、アイネスさんの思いを受け継いでこれからも演奏会を続けていきましょう、困難な立場を強いられている人たちのベネフィット（利益、役立ち）のために。

JVC国際協力コンサート、その魂

JVC初代事務局長／特別顧問　星野（ほしの）昌子（まさこ）

JVC国際協力コンサートのこれまで

【一九八九】アイネスを中心に『JVCベネフィット・コンサート』が東京で始まる。楽曲はヘンデル『メサイア』。
【一九九二】『天声人語』で東京公演が紹介される。
【一九九四】『天声人語』掲載をきっかけに大阪公演が始まる。コンサート名を『JVC国際協力コンサート』に変更。
【一九九七】大阪公演で初めて『メサイア』以外の曲、バッハ『クリスマス・オラトリオ』を演奏。
【二〇〇四】青木洋也先生指導、柴大元氏運営の「JVC合唱団」を設立。
【二〇〇六】東京公演でも初めてバッハ『クリスマス・オラトリオ』（全曲）を演奏。
【二〇一三】二十五周年を機にアイネスが実行委員長退任。

■「なぜキリスト教の曲を」

当時は御茶ノ水にあったJVC事務所にアイネスさんが訪ねて来られた時が、たしか最初の出会いでした。RIJでの取り組み（支援コンサート）を通じてJVCを知り、ボランティアとして現地に行きたい、と話されました。とても控えめな、しかし芯はしっかりした方だな、そう感じたことを覚えています。それで行かれたのがソマリアでした。帰国後、RIJでの彼女の取り組みを知っていた私は、JVCの活動資金をつくるためのコンサートをいっしょにできないか、と事務局長としてですがおずおずと提案しました。数日後、「JVCはお金をつくるのがあまりうまくなさそうですね、やりましょう」と彼女は言ってくれました。

「なんでJVCが『メサイア』、キリスト教なのか」と事務局内で議論になりました。多少合唱の経験があった私は、「人間の力を超えた（神と呼ばれる）大きな存在によって生かされている」という意識はどんな宗教にも共通すること、そして合唱とはひとりの素晴らしい声の人が大声で歌うものではなく、一人ひとりが他のパートの声と自分の声を合わせながらつくりあげることを意識して初めて素晴らしい合唱になること、それはJVCの理念や運営方針に通じる、と言いました。今思ってもちょっと苦しい説明ですが賛同は得られ、まぁ試しにやってみよう、となりました。

コンサートへの支援の依頼に企業へ行く際に、最初は事務局長の私が説明していましたが、途中からはアイネスさんを前面に出しました。本人はあまり乗り気ではなかったようですが、すらっとした碧眼（へきがん）のアメリカ人女性がとうとうと世界の状況と支援の重要性を伝えると、相手側の反応がぜんぜん違うんですね。容姿のこともあったでしょうが、アメリカという国が第二次世界大戦後に醸成してきた、政府でも企業でもない、普通の市民が草の根から自然と生みだす「ノン・プロフィット」な取り組み、その価値へのゆるぎなさが伝わったのだと思います。

ふたを開けてみれば公演は大成功。収益もあがり、翌年以降も継続することになりました。

■家族の支えと思慮深さと

アイネスさんご夫妻の結婚四十年のお祝いパーティーに、ご自宅のあるウィンスコンシンに招かれたことがありました。そこで、家族全員が彼女のこのコンサートへの取り組みを支えていることを改めて実感しました。とりわけ夫のデイビッドさん。そのときの招待客全員の交通費を（日本からの飛行機代も！）すべて彼が提供してくださったのですが、「私たち家族のなかで、神様に一番近いところにいて世界に貢献しているのはアイネスです。それを家族として支えることができることが私の誇りなんです。彼女の仕事に比べれば、私のしていることなんて『ツメノアカ』にもなりませんよ」在日経験が長く日本語が達者な彼が、なんのてらいもなく言ったんです。もともと彼は宣教師だったとは言え、心からの言葉だとわかって、もうね、まいっちゃった（笑）。この支えは彼女にとってとても大きいでしょうね。

また、初年度の公演日は偶然にも十二月八日だったのですが、彼女は来場者に向けての開演のあいさつで「今日はパールハーバー、記念的な日ですね」と切り出したのです。原稿を知らされていなかった私はちょっとびっくりしましたが、しかしそうした過去の争いや困難を乗り越えて共同で取り組むべき課題がいまの世界にはあり、その状況を少しでも良くするためにいっしょに協力しましょう、と続けたのです。あぁこの人は思慮深い人だ、と感じ入りました。

◎

この二十五年間にわたり、アイネスさんは「世界の課題に対して、一人ひとりが望む形で参加できる／自分の可能性を発露できる」機会のモデルを、このコンサートで提供してきてくれたのかなと思います。アイネスさん、長い間お疲れ様でした。

JVC国際協力コンサートの今後

2014年から「音楽で人をつなぐ」JVC国際協力コンサートの新しい歴史が始まります。指揮者には古楽の本場オランダよりマノイ・カンプス氏を招聘。これまでアイネスが作ってきた「土台」とその精神を受け継ぎ、新しい挑戦を続けていきます。（石川）

「変わっても、変わらないもの」を大切に

コンサート事務局　石川（いしかわ）朋子（ともこ）

■始まりのアクション

『JVC国際協力コンサート』。人見記念講堂の前に出ていたこの看板で、私はJVCと出会いました。「国際協力」「ボランティア」に関心はあったものの、何も動けていなかった当時の私は、何かつながるかも、という期待を持って一万円のチケットを買い、『メサイア』を聴きに行きました。会場でJVCのパンフレットを見てすぐに会員に申込み、家で会報誌を読むだけの会員時代が一年ほどあり、その後、東京とエチオピアでボランティアをし、そして〇二年からコンサート事務局担当になりました。「今」につながる一枚だったことを思うと、アクションを起こすことの大切さを実感したコンサートでした。

■ときには変える勇気を

このコンサートの目的は、「JVCの活動資金をつくる」「JVCを知ってもらう」そして、「音楽を楽しむ」です。私が担当になった〇二年は、企業協賛が大幅に落ち込み始めていた頃でした。一千万円以上あった収益は、漸減（ぜんげん）し六百万円程度になっていました。その改善のため、〇四年に東京のオーケストラを変え、JVCが運営する「JVC合唱団」を設立しました。その時の関係者での議論では、「合唱団を変えたら絶対続かない」「今のオーケストラのネームバリューは企業協賛には重要」という意見と、「今のままでは続かない。変えてみよう」という意見に分かれました。

議論を重ねて結論も行ったり来たりする状況の私たちに、星野さんがおっしゃった今でも忘れられない言葉があります。「今がベスト、と思った時点でその団体（活動）は硬直する。もっとうまく、もっと良くなるには、と常に考えることが大切。Creative Chaos（創造的混沌）はその時々において必要なこと」。この言葉が、「変える不安」で立ち止まっていた私たちの背中を押してくれました。

この「JVC合唱団」は、それまで以上に「音楽で国際協力」の特徴を強くしていきました。JVC合唱団ができて一年目か二年目の公演直後、合唱団の方から「これまでは自分のために歌っていた合唱だけど、初めてJVCのスタッフの話で聞いた、現場の誰かを思って歌いました。感動しました」と言われたときは、事務局として本当に幸せな気持ちになりました。

こうした試みで収益は回復したものの、企業協賛が増えてきたわけではありません。企業数は最高収益を出した頃に比べて昨年は半数弱でした。企業協賛は景気に影響されやすいものですが、そうしたなかでも継続して、また新規に支えてくださる企業があります。「景気に左右されないよう我社は少額だけど継続して応援したい」「JVCの現地の人を大切にする姿勢は、中小企業と同じ。倒産しない限り応援しますよ」の言葉に励まされます。

■人をつなぐコンサートに

今現在、すでに来年以降の公演の準備をアイネスに変わって事務局が進めています。そのなかで、このコンサートに関わってくださる多くの人が「JVCを応援するアイネスさんのスピリットに共感して」参加されていることを改めて実感しています。「現地の人のために」、「コンサートで人をつなぐ」この試みは、東京二十五年、大阪二十年という年月をかけ、アイネスを中心に続いてきたのです。

彼女は指揮者やソリストとの出演交渉の際、「あなたの技能と時間をJVCのために使ってください」と言います。出演者にきちんとこのコンサートの趣旨とJVCを知ってもらい、「お互いに一緒にコンサートをつくる」という気持ちを持ってもらいたいと強く願っているからです。今、私は同じ言葉を、このコンサートをこれから一緒に支えていただきたい皆さんへ言いたいと思います。「あなたのお時間と技能を、JVCのために使ってください。一緒にコンサートをつくっていきましょう」。